

令和 7年 3月 19日

かかりつけ医の診療範囲、意識と経験が大きく影響

<研究成果のポイント>

- 静岡県の内科を標榜する診療所の医師を対象に診療範囲に関するアンケート調査を行った。
- 医師の考えが最も強く影響し、「幅広く診療したい」と考えている医師が最も幅広く診療をしていた。また日医かかりつけ医機能研修制度を修了している医師、ローテート研修の経験がある医師の診療範囲が広い傾向にあることが明らかになった。
- 小児や思春期医療、女性医療、在宅医療、緩和ケア、メンタルヘルスの提供頻度が低いことが確認された。

※本研究成果は、国際英文誌「Family Medicine and Community Health」に日本時間2月3日に公表されました。

<概要>

本学地域家庭医療学講座の樋口智也特任助教らの研究グループは、静岡県の内科標榜診療所の医師を対象にアンケート調査を行い、かかりつけ医の診療範囲と関連する要因を検討しました。最も強く関連しているのは医師の考えで、「幅広く診療したい」と考えている医師の診療範囲が最も広いことが明らかになりました。次いで、日医かかりつけ医機能研修制度の修了者やローテート研修の経験者の診療範囲が広い傾向にあることが明らかになりました。また小児や思春期医療、女性医療、在宅医療、緩和ケア、メンタルヘルスの提供に課題があることが確認されました。

<研究の背景>

かかりつけ医が患者さんの多様な健康問題に幅広く対応することが重要とされています。しかし、日本の医療制度ではかかりつけ医登録制がなく、患者さんが自由に診療科・医療機関を選ぶことができるフリーアクセス制が採用されているため、かかりつけ医が十分なゲートキーパー機能を発揮しにくい状況にあります。かかりつけ医の診療範囲については、これまでの研究が限られており、その実態があまり明らかにはなっていません。本研究ではかかりつけ医の診療範囲の実態を調査し、診療範囲と関連する要因を明らかにすることを目的としました。

<研究手法・成果>

本研究では、静岡県の内科を標榜する診療所の医師を対象としてアンケートを用いた横断調査を行いました。

診療範囲の広さを測定するために8つの診療領域、78の診療活動、23の手技/処置の合計109項目の診療内容について実施頻度を尋ねました(図1)。「日常的に実施している(毎日～週1回)」「ときどき実施している(月1～2回)」「たまに実施している(年に数回)」と回答した項目の数を測定しました。実施している項目数と年齢、性別、医師経験年数、診療所勤務年数、ローテート研修の経験の有無、へき地での診療経験の有無、専門領域、日医かかりつけ医機能研修制度の修了の有無、診療範囲に対する考え(幅広い診療をしたい・どちらともいえない・専門分野に絞った診療をしたい)、診療所の特徴(医師数・医療専門職種数・開設主体・入院設備の有無など)をアンケートで調査し、診療範囲に関連する要因を検討しました。

有効回答者は 389 名であり、診療範囲は平均 60.4 項目でした。分析の結果、診療範囲には医師個人の考えが最も強く関連しており、「幅広い診療をしたい」と考えている医師（全体の 51.2%）の診療範囲が最も広いことがわかりました（ $\beta=0.45$, $p<0.001$ ）。若い医師、へき地医療の経験者、内科以外の専門医が幅広く診療したいと考えている傾向にありました。次いで、日医かかりつけ医機能研修制度の修了者（ $\beta=0.34$, $p<0.001$ ）やローテート研修の経験者（ $\beta=0.18$, $p<0.001$ ）は診療範囲が広い傾向にありました（図 2）。また元々内科以外の外科系の専門だった医師やへき地での診療経験がある医師は幅広い診療をしていました。

高齢者診療や慢性疾患の治療はほとんどすべての医師が行っていましたが、乳幼児の予防接種・乳幼児健診や起立性調節障害や不登校の相談など小児や思春期に特有のケアや、在宅医療や緩和ケアは半数以上の医師が行っていませんでした（図 3, 4）。月経困難症や低用量ピルの処方や日常的に不安症や軽症うつ病を診療している医師は 3 割以下であり、女性医療やメンタルヘルスの提供が少ないことが明らかになりました（図 4）。

<今後の展開>

本研究の結果から、かかりつけ医の診療範囲は、診療範囲への考えや研修経験によって大きく影響を受けることが示唆されました。幅広い診療を希望する医師に対して生涯教育や研修を強化することが診療範囲を広げるのに役立つかもしれません。特に小児や思春期の診療、在宅医療や緩和ケア、女性医療、メンタルヘルスの診療の拡大が望まれます。

<用語解説>

ゲートキーパー機能：かかりつけ医が患者の最初の診療窓口となり、適切な診療や専門医への紹介を行う役割

<発表雑誌>

Family Medicine and Community Health (DOI: 10.1136/fmch-2024-003191)

<論文タイトル>

Scope of practice of Japanese primary care physicians and its associated factors: a cross-sectional study

<著者>

樋口智也、中村美詠子、尾島俊之、井上真智子

<研究グループ>

浜松医科大学 地域家庭医療学講座
浜松医科大学 健康社会医学講座

<本件に関するお問い合わせ先>

浜松医科大学地域家庭医療学講座
〒431-3192 浜松市中央区半田山 1-20-1
特任助教 樋口 智也
tomoyah@hama-med.ac.jp

＜参考図＞

図 1: 診療範囲の項目

診療領域 8	診療活動 78	手技/処置 23
小児のケア 思春期のケア 成人のケア 高齢者のケア	小児 発熱・喘息発作初期治療・乳幼児健診・予防接種	小児採血・小児点滴
	思春期 起立性調節障害・尋常性ざ瘡・不登校の相談	
入院診療 学校医 産業医 オンライン診療	慢性疾患 高血圧・脂質異常症・高尿酸血症・糖尿病・インスリン管理・甲状腺疾患 気管支喘息・COPD・心不全・抗凝固療法・過敏性腸症候群・頭痛 血尿・尿路感染症・貧血・食事指導	
	高齢者 高齢者総合機能評価・アドバンスケアプランニング	
	予防医療 禁煙外来・肺炎球菌ワクチンの推奨・HPVワクチン接種	
	在宅医療 訪問診療・往診・施設入居者・小児在宅 緩和ケア 在宅酸素・褥瘡・在宅/施設看取り・オピオイド	胃ろう交換・経鼻胃管の挿入と管理 腹腔穿刺
	皮膚/小外科 湿疹・蕁麻疹・表在性真菌症・熱傷・動物咬傷	KOH鏡検・創傷止血・創縫合・指 神経ブロック・冷凍凝固・膀胱除去
	筋骨格 骨粗鬆症・急性腰痛症・捻挫・単関節炎 変形性膝関節症・肩関節周囲炎	肘内障整復・膝肩関節穿刺 シーネ/ギプス固定
	感覚器 アレルギー性鼻炎・めまい・中耳炎・結膜炎	鼻出血止血・耳鏡
	メンタルヘルス 睡眠障害・認知症・BPSD・アルコール使用障害・うつ病・不安症・パニック症	
	女性医療 更年期障害・ホルモン補充療法・月経困難症・低用量ピル処方・妊婦ケア	子宮頸部細胞診
	その他 慢性疼痛（非オピオイド・鎮痛補助薬） スポーツ外傷/障害・脳卒中後ケア/リハビリ	上部消化管内視鏡・POCUS

図 2: 診療範囲への影響が大きい要因

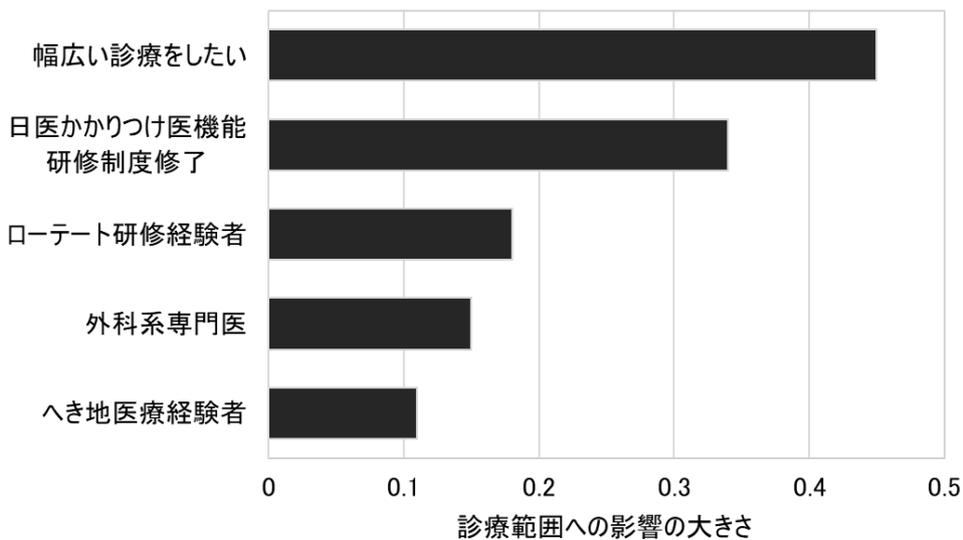


図 3: 診療領域別の実施頻度

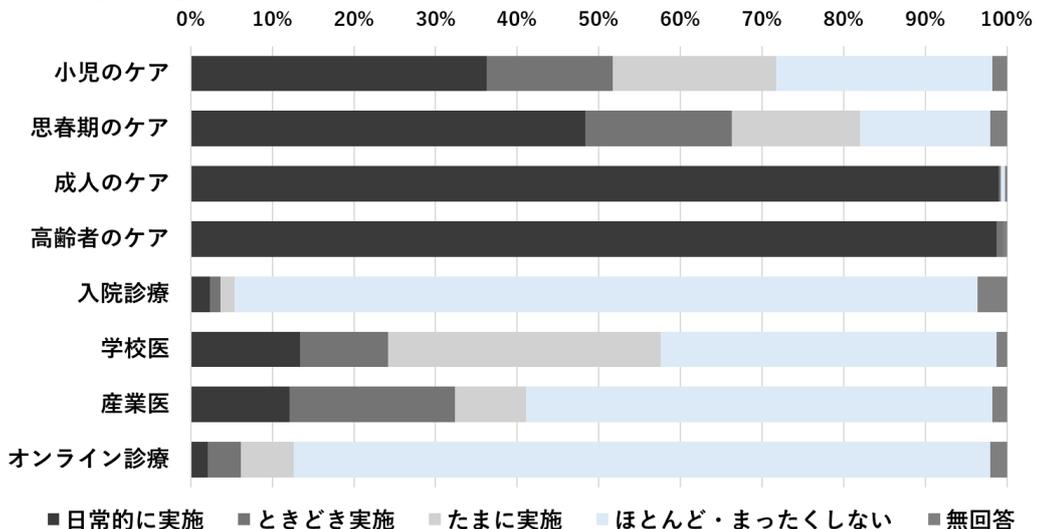


図 4：診療活動の実施頻度

